アルテス　リベラレス　（岩手大学人文社会科学部紀要）
第110号　2022年６月　33頁～45頁

日本人英語学習者による欧米とアセアン（準）英語圏への留学順序と目的

小　林　葉　子

要旨

世界的にみると，アセアン英語圏への早期・短期留学は欧米英語圏への長期留学のための「踏み台」として位置づけられることが多い。韓国人親子たちによる早期留学はその典型例として盛んに研究されてきた。しかし欧米大学からの学位取得を目指さないことの多い日本人学生の場合，アセアンから欧米へという「ステップアップ」型モデル以外の留学パターンと目的があるのではないか，さらに，一見「ステップアップ」型モデルに見える留学順序であってもその動機には特徴があるのではないか，という仮説を立てた。そこで，アセアンと欧米両方に英語留学をした85名から質的・量的データを収集し，彼らの留学順序パターン，その動機，そして欧米とアセアンという二つの英語圏での英語留学を通じて得られたと認識している成果について調査を行った。その結果，「ネイティブ英語」イデオロギー，教育機関・教育産業界が生産する留学言説，異文化体験型海外短期研修の意義，国際教育ハブとしてのアセアン諸国の台頭など，国内外の関連要因が本研究のテーマに影響を及ぼしていることが明らかとなった。

研究背景

韓国や中国など多くのアジア圏出身の学生たちは欧米英語圏での学位取得という最終目標をもっている。その中で，経済面や英語力で不安があるが，それでも大学進学を目指すことのできる若者たちはまずはアセアン英語圏へ早期留学し，英語とアカデミックスキルを習得したのちに，欧米英語圏に移動するという「ステップアップ」型モデルを選ぶことが多い（小林2017）。さらに，日本や韓国の大学が盛んに提供するようになっている英語による教育プログラムへの留学を経由する場合も増えている（嶋内 2014；2016）。

対照的に，「内向き」と称される日本人学生たちによる学位取得のための欧米圏留学は減りつつある。しかしながら，日本人学生たちの英語ネイティブ志向はいまだに根強く，欧米英語圏への短期語学留学は相変わらず人気がある。また同時に「参加のための語学力や金銭的ハードルも低い」アセアン研修参加者も急増している（星野2015, 43頁）。日本国内の留学関係者たちは「ステップアップ」型モデルを念頭に，アセアン研修にまず参加させることで欧米英語圏での本格的長期留学を目指す学生たちを増やすことを想定・期待している場合も少なくない（星野2015, 44頁）。

ただ現時点では，日本の若者たちがアセアンと欧米という二つの英語留学地をどのように位

置づけ，どのような留学移動をしているのかについて分かっていない。そこで，本調査ではこの二つの英語留学先で英語留学を経験した日本人英語学習者を対象にアンケート調査を実施し，彼らの留学移動パターン，その動機，二つの英語留学経験から得られたと自身が考える成果について調べることとした。なお，本稿は国際ジャーナルに掲載された英語論文（Kobayashi, 2020）を踏まえ，構成，考察，参考文献を含め，大幅に修正・加筆したものである。

本研究

参加者

民間調査会社に委託して2019年にインターネット調査を実施した。回答者は調査時点で同社にモニター登録をしていた人たちである。対象は18－34歳までの日本在住者で，欧米英語圏（アメリカ，イギリス，オーストラリア，カナダ，ニュージーランドのいずれか）とアセアン準英語圏（シンガポール，フィリピン，マレーシアのいずれか）の両方の（準）英語圏に渡航し，現地の語学学校に在籍したことがあるひと，とした。予算の都合上，100名からデータを収集した時点で調査を終了とした。不完全な回答をした9名と5回以上の海外英語研修歴のある6名を除いた85名（36名男性，49名女性）を最終の調査参加者とした。

85名のうち，50名は両英語圏にそれぞれ１回ずつ英語留学経験があり，25名は合計3回の英語留学経験あり，10名は合計4回の英語留学経験があった。回答時点での職業は50名がフルタイム勤務，17名が学生，9名がパート勤務，6名が専業主婦，2名が無職，1名が無記名であった。過半数以上の回答者は1回目と２回目の英語留学ともに2週間未満から1か月未満と短期であった。また80%以上が強制ではなく自主的に英語留学をしている。

アンケート調査・分析

本調査では，欧米英語圏とアセアン準英語圏への渡航順序と渡航動機について詳細にデータ収集をするため，選択式設問と自由回答を設けた。なお，アンケート調査では先入観を持たせないため，欧米圏とアセアン圏を区別する「英語圏」・「準英語圏」や「ネイティブ」・「ノンネイティブ」という用語は使用せず，「欧米の国」「アセアンの国」と表記した。

まず，85名たちの渡航パターンを分析した。その結果，（1）アセアン→欧米，（2）欧米→アセアン，（3）アセアン↔欧米，という３つの渡航パターンが確認された。その結果を踏まえ，第二分析として，それぞれのパターン内で共通してみられる渡航動機があるかどうか調べた。具体的には，アセアン留学後に欧米留学をしているひとたちの動機は「ステップアップ」型モデルといえるのか（つまりアセアンで英語を上達させたあと，より長期的に欧米に英語留学しているのか），また欧米留学後にアセアン留学をしている人たちの場合や欧米とアセアンを複数回行き来しているひとたちの場合の留学動機は何なのか，というテーマについて分析した。

結果

留学順序

表１が示すように，最終的に欧米英語圏を目指す世界の多くの留学生たちとは異なり，欧米

英語留学後にアセアン英語留学をしている日本人の存在が珍しくないことが明らかとなった。アセアン英語圏で英語留学してから次に欧米圏で英語留学したという，一見「ステップアップ」型に見える場合も多く見られた。その中で，複数のアセアンまたは欧米諸国での英語留学を経ているひとが13名いた。４名と数は少ないが，両英語圏を行き来しているケースもあった。

表１：複数回の英語留学経験者の留学順序パターン（n=85）

アセアン留学後に欧米留学した者	合計：44
１）ASEAN→West	31
２）ASEAN×2→West	1
３）ASEAN×3→West	2
４）ASEAN→West×2	7
５）ASEAN→West×3	3
欧米留学後にアセアン留学した者	合計：37
６）West→ASEAN	21
７）West×2→ASEAN	11
８）West×3→ASEAN	2
９）West→ASEAN×2	3
アセアンと欧米間を行き来した者	合計：4
10）ASEAN→West→ASEAN×2	1
11）ASEAN→West→ASEAN→West	1
12）West→ASEAN→West	2

留学順序の決定要因

「アセアン→欧米」留学順序とその動機

「アセアン→欧米」という順序で英語留学した44名の留学動機を分析したところ，自身の英語力の低さや海外渡航歴の少なさを意識した上で，欧米英語圏よりもアセアン準英語圏のほうが現時点では自分には適している，と判断していたひとが多かった。その一方で，ではなぜ英語初級者や海外渡航非経験者にはアセアン準英語圏での英語研修が適しているのかと思うのか，という理由については，アジアに位置する非英語圏の日本との心理的・文化的近さを想定した上で，「ハードルが少ない環境」で「親しみを持って話しかけてもらえる」と期待していることが伺えた。逆に言うと，欧米英語圏に暮らすひとたちはアジア人ではなく，「英語ネイティブ話者」である，という認識があり，そうした人たちが暮らす欧米英語圏は英語学習者のアジア人である自分にとってはハードルが高い，という意識を持っていた，とも解釈できる。

- 英語力に自信がない最初のうちにアジアで学ぶことで，英語力に自信がついた。彼らにとっても英語は第一言語ではないから。
- アセアンのノンネイティブというハードルの少ない環境で練習するのは英語を話す機会のない日本人にとってのいい練習材料だと思う。
- 親しみを持って話しかけてもらえる民族的近さを利用して最初の壁を超えるため。
- 始めにフィリピンでの留学を経験したことで英語でコミュニケーションが取れないことの不便さ，自身の実践英語力の無さを実感でき，オーストラリアでの本格滞在の前に事前準

備・学習ができたことが大きな違いを生んだ。
- 最初の留学ということで，まずひとりで生活することに慣れること，そして英語を話すことの基礎から学びたかった。
- アメリカなどよりかは安心感がある。

「アセアン→欧米」という順序で英語留学した回答者たちは，アセアン準英語圏での英語研修のあとに欧米英語圏に渡航したわけであるが，その動機として，「世界の中心」で「先進国」の欧米英語圏への「憧れ」，「興味」，「いいイメージ」があり，そこで「本格的に」「高レベルでリアルな英語」や「ネイティブの発音，話し方」を学んでみたいという目的を記述した回答が圧倒的に多かった。

- カナダに憧れがあり，マイルドな英語が学べて治安も良いからです。
- 本格的に英語を学びたいと感じたのが欧米に留学した理由です。
- 英語力がついてきた頃で，自信があったので，本場で勉強したかったから。
- 実際にネイティブの人の英語に慣れることで，生きた英語を学びたかった。

その一方で，欧米英語圏での大学・大学院留学をするために必要な英語力を修得しようと非常な努力をしている他の留学生たちとは異なり，日本人英語学者たちの場合は，欧米英語圏での異文化経験や英語学習経験そのものを求めている傾向にあり，果たして「ステップアップ」型と位置付けていいのか，という疑問が残る。

- さらなる英語学習の向上と日本とかけ離れた文化に触れるため。
- 一度行ってみたかったから。質の高い授業が受けられたから。
- 欧米の英語や生活に触れたかったから。世界を旅する機会が欲しかったから。
- 英語の習得だけでなく文化を知ったり，現地の人と交流したかったから。

「欧米→アセアン」留学順序とその動機

欧米の大学からの学位取得を最終目標とする諸外国の留学生たちの場合，経済的または英語力不足の理由から「アセアン→欧米」という順序を選択する若者たちは非常に多いが，彼らはいつまでも第二言語としての英語であるESLプログラムに所属する「英語学習者」ではない（小林 2017）。さらに「ステップアップ」型に逆行し，欧米英語圏からアセアン準英語圏に英語学習目的のために「戻る」というパターンは報告されていない。対照的に，日本人英語学習者の場合は「欧米→アセアン」という留学順序で英語留学した回答者が37名確認できた。アセアンと欧米間を行き来した4名と合わせると，この41名こそが日本の若者（のみ）に顕著に見られる留学パターンのケースである。そして「アセアン→欧米」という順序で留学したグループ同様に，「欧米→アセアン」グループに関しても，上達させた英語力を生かして，アセアン諸国の大学や院に正規留学し，学位取得を目指しているわけではない。「英語学習者」という立場のまま，「ステップアップ」型に逆行し「戻っている」ことになる。

では，何故「欧米→アセアン」という留学順序を選択したのだろうか。興味深いことに，「アセアン→欧米」群の多くが，アセアン諸国のほうが欧米圏よりも「ハードルが少ない環境」だと認識していることとは対照的に，「欧米→アセアン」群の場合は，自分たちは「ネイティブ英語」に慣れているため，欧米英語圏のほうが「ハードルは低い」と判断していたという可

能性が伺える：「*日本の学校で学んだのと同じ発音の英語が話されている欧米諸国で学んだ後に，初めて触れるアジア訛りの英語を理解する方がすんなり入ってくるから*」。

さらに「アセアン→欧米」群の回答者たちが，同じアジア圏で親日家の多いアセアン諸国でまず自信をつけ「最初の壁を越える」ことを目指していたのとは対照的に，「欧米→アセアン」群の回答者の場合は治安の良い欧米でまず海外滞在経験や英語力の面で「自信を付け」，そのあとに，治安面で不安のあり，馴染みのない英語が話されている（であろう）アセアン諸国に向かうという「順番で正解だ」と判断した可能性がある。

- まずはネイティブの国，次に文化を学びたい国で自信を付けるという順番で正解だと思ったから。
- 最初にアメリカに慣れてしまうことで，アジアでは治安の面などでより安心できた。
- アセアンを先にしてしまうと，英語力は上がっても独特な発音が身についてしまう気がするから。

そして，こうした「欧米→アセアン」群の中には「アセアン」という地域や文化への興味について言及した回答者たちもいた。

- 東南アジアの社会文化に興味があり，多様性のある社会の中で過ごしてみたいと思ったから。（イギリス→マレーシア→シンガポール）
- アメリカにて培った英語を使って世界的に価値観を広げる為。（オーストラリア→アメリカ→シンガポール）
- シンガポールに興味があったので，文化を学ぶことも兼ねたかったから。（カナダ→シンガポール）
- 欧米はまさに語学留学のために英語を勉強できた。一方でASEANは英語を活かしその国の事をしり知識を深めることができた。（アメリカ→マレーシア）

つまり，これまで，日本の英語学習者たちは欧米英語圏で「ネイティブ」の英語を学び，そうした英語を学ぶ地元の人とホームステイなどを通じて交流することに興味を持っていると想定されてきたが，現在の若者の中には，アセアンや他のアジア圏での文化や異文化交流に興味を持つ人たちが生まれつつあることが伺える。なお，フィリピンという地での文化理解に対する興味について言及した回答はなかった。

欧米とアセアンという二つの英語圏での留学から得られた「成果」

本調査のアンケート項目で「アセアンでの英語留学」と「欧米での英語留学」で「得られた成果」について質問したところ，いずれも4割が「英語は国際語であるという認識」を選んでおり，その割合は「英語は欧米の言語であるという認識」（24%）を上回っていた（複数回答）。さらに，以下に示すように，アセアンと欧米という二つの英語圏で英語留学をすることによって，渡航前にはなかった英語観を持つようになった回答者たちが少なくない。

<u>「英語圏」と「英語」に関する新たな認識</u>

- 同じ英語だが国によって全く文化もイントネーションもことなる違いが感じ取れて楽しかった。

- アセアンと欧米では文化が全く違うのと同様に英語もなまりがあり異なる言語のように感じた。
- アクセントとかが全く違った。留学経験のある英語教師からしか授業教わってなかったから，教わったアクセントが正しいと思っていたが，アクセントが違うだけで内容が変わってしまう。
- それぞれの国に発音や表現の仕方など違い，特徴があり，1つの国に長く滞在し慣れることも大事だが，別の国に行き様々な違いを見つけるのも大切だと思った。

「完璧」な「正しい英語」とは違う「世界共通語」としての「英語」への気づき

- 英語といえど国による癖や表現の違いがあり，どれが正しい英語とかではなく共通語として存在しているのだという事を知った。世界を知るためのツールとして英語を学べた事は今でも役に立っている。
- 英語はまさに世界共通語だということが分かったし，コミュニケーションの幅が広がった！積極的に取り組んだり，自分から話しかけることの大切さがわかった！
- 案外，英語が完璧や発音の完璧さは問われず，完璧じゃなくてもいいと思った。

英語圏としてのアセアンへの気づき

- アセアンの英語は欧米に比べると発音の訛りや癖があることが分かったが，それでも日本とは比べ物にならない英語力の高さがあることが分かった。
- フィリピンの先生方も英語はとても上手でしたが，オーストラリアでネイティブの先生の従業を受けて，彼らも訛りはあったんだなと気づいた。
- 欧米だけが英語を必要とする国ではないこと。
- どちらも英語が溢れていたので勉強になった。

考察

英語留学生としての海外移動

上述したように，他国の留学生たちはまず英語学習者として英語「を」学ぶために，アセアンや欧米などに海外留学することはあっても，その後は正規留学生として英語「で」学び，学位を取得するという次の段階に移行することが当然とされている。その際に，経済的にも英語力的にも制限が大きい若者の場合，フィリピン，マレーシア，シンガポールといったアセアン英語圏にまず留学し，その後欧米諸国に移動する，という踏み台（stepping-stone）アプローチを選択するケースが多い。中には，日本や韓国の大学が提供するEMI（English-medium Instruction）プログラムで学位を取得したあとに，さらに欧米圏に留学することを計画している留学生たちの存在もある（嶋内 2014；2016）。

こうした留学生移動が主流の中で，本調査の結果と考察を英文論文（Kobayashi, 2020）としてまとめ，国際ジャーナルに投稿したところ，査読者の一人から，何故日本の英語学習者たちは英語学習のために何度も短期海外研修を繰り返すのか，という点について説明するように求められた。

アセアンにしても欧米にしても，海外の大学機関から学位取得を目指す日本の若者が少ないのは，そもそもそうしなくても就職の障害にはならないためである。ただし，「内向き」と見

なされることになる彼らは，「英語力＝グローバル人材」というイデオロギーに根ざして企画された大学主催の（超）短期海外研修プログラムに参加することを奨励される。吉田（2014）はこうした状況について，日本の若者は「内向きな若者と責められているが，大人自身が内向きであり責められるべきは大人であることに気づくべきである」（36頁）と批判している。

日本の大学機関がグローバル化を推進している成果として「留学」経験者の数を増やすことに腐心する中，絶好の留学先として注目され始めたのが近場でコストも低いアジア，特に英語が広く使われているアセアン諸国である（星野 2015）。星野（2015）はこの新しい選択肢に理解と関心を示しつつも，吉田（2014）同様に「グローバル人材」育成という面からは慎重な立場をとっている：「１カ月未満の留学が主である東南アジア留学者の増加が，日本のグローバル人材育成に直結しているかどうかは慎重に議論を進めていく必要がある」（44頁）。

日本の学校機関がアセアンの地を英語学習の場として認識するようになったことは大きな歴史的な変化とはいえる。実際，中学や高校がアジアやアセアンでの海外研修旅行を企画したり，フィリピンやシンガポールなどのアセアン出身のALTが増えていることから，若い世代の間では，アセアンでの英語使用率の高さとそこでの満足感・居心地の良さを実感した生徒たちの数が増えている可能性はある（日本修学旅行協会2019；JETプログラム 2019）。その背景には，アセアンという地域の国際的「教育ハブ」圏としてのブランド力向上があることは言うまでもない。その一方で，日本の生徒・学生たちは英語学習者・異文化体験者の立場からは脱却することがないからこそ，短期英語留学を繰り返すという，海外有識者や国際教育関係者には奇妙に映る現象が生じている。

「アセアン→欧米」留学移動と教育イデオロギー

次に，英語学習者としての日本の若者たちによる「アセアン→欧米」と「欧米→アセアン」という留学順序選択の背景にある教育的イデオロギーの存在に考えてみたい。まず「アセアン→欧米」についてであるが，日本の教育機関やアセアン留学奨励団体は，英語力と海外留学への自信がない日本の若者たちに対し，まずアセアンという地理的・文化的に近い英語圏で留学体験をして自信を付けた後で，欧米英語圏でのより長期的な「英語」留学に挑戦したら良い，というアドバイスをする。

例えば，「海外留学口コミサイト 留学thank you!」サイトに2018年８月30日に掲載された「フィリピン＋カナダ留学経験者が「2か国留学」の魅力を解説！」という記事では，「欧米留学前のフィリピン留学は，留学をより効果的にするための準備期間」としており，その理由の一つとして「明るく，とってもフレンドリー」で「冗談好きでよく笑う国民性」の先生たちの存在のため，「居心地の良さが抜群」であることを挙げている（2022年３月13日時点で1,629名が閲覧）。同様に，「ファーストイングリッシュ　フィリピン英語留学」サイトでは，日本人英語学習者がいきなり欧米英語留学をすることは「絶対にNG！」である理由として，「日本人英語留学生の多くは英語初心者～初級者レベル」のため，「初心者向けのクラスは日本人がとても多」くなり，さらに，「休み時間や放課後に外国人生徒に積極的に話しかける勇気がなく，結局日本人の留学生とばかり過ごしたり，部屋に引きこもりがちになったり」するためだとしている。

こうした言説をあちこちで見聞きするようになると同時に，上述したように，アセアンでの修学旅行やアセアン出身のALTの増加という点からも，「アセアン→欧米」という留学順序を選択する生徒・学生たちが増えている可能性はある。

「欧米→アセアン」留学移動と教育イデオロギー

では，「欧米→アセアン」（本調査では43%の回答者）という留学順序の場合はどうだろうか。少なくとも，この順序を推奨する日本の教育機関やアセアン留学奨励団体の存在は確認できていない。つまり，「欧米→アセアン」という英語留学順序を推奨する教育言説の存在という観点からでは，この順序選択を説明できない。では教育言説以外のどのような要素が，日本人英語学習者の「欧米→アセアン」留学順序を後押ししているのだろうか。

第一に，「結果」でまとめたように，最初からアセアンでの文化理解や異文化交流に興味を持っており，「欧米→アセアン」という留学順序を選択した，という回答者たちの存在が確認できた。「まず欧米英語圏で英語力を向上させたあと，その英語力を生かしてアセアン社会について理解を深めたい」という若者たちの思いを後押し，または先導する背景には，アセアン諸国の経済的発展と教育ハブ・観光地として成長，そしてそうした英語が通じる近隣アジア諸国に興味を抱いている日本の若者たちの増加があると思われる。ただ，以下で考察するように，そうした短期海外留学を通じでどの程度「世界的に価値観を広げ」たり，「理解を深める」ことが出来るのか，そして，どのような交流や体験をしたら，目的を達成したことになるのか，という点については国際教育研究の観点から議論の余地はある。同時に，どのようなことがきっかけで，「欧米はまさに語学留学のために英語を勉強」をし，「一方でASEANは英語を活かしその国の事をしり知識を深め」ようと思うに至ったのか，という点について今後さらに研究をすることで，日本の若者の新しい欧米英語圏観とアセアン英語圏観が見いだせるかもしれない。

第二に，同じく「結果」でまとめたように，「ネイティブ英語」を長年学び，治安の良い日本で暮らしている日本人英語学習者にとって，「ネイティブ英語」圏であり，先進国である欧米のほうが「ハードルは低い」，と判断する回答者の存在が確認できた。こうした教育言説も存在しないものの，先進国・英語圏としてのイメージを抱きやすい・既に持っている，という意味では，こうした認識と選択をする日本人英語学習者の存在は不思議ではないのかもしれない。では何故欧米で慣れてからアセアンに留学しようと思ったのか，欧米留学目的とアセアン留学目的は違うのか，という点であるが，可能性としては上記にまとめたように，欧米という「安心」の地で英語学習をし，そのあとでその英語力をいかしてアセアンで冒険的な異文化体験をする，という動機の存在があるのかもしれない。

さらに第三として，最初から「欧米→アセアン」という留学順序を選んだのではなく，結果としてこの順序になった回答者が多く含まれている可能性もある。つまり，「世界の中心」の欧米で「本場の英語」や「その土地の文化」を学ぼうと，欧米英語圏に英語留学したものの，思ったほどの成果は得られなかったために，アセアンでの英語留学という，事前には予定していなかった選択をした，という可能性である。著者が過去にカナダの語学学校で行った参与観察・インタビュー・アンケート調査でも，英語力の低く初級クラスに振り分けられる日本人英語留学生たちはヨーロッパや南アメリカからの白人学生たちと交流を持つことがほぼなく，結果として日本人同士や韓国人などアジア人で固まる傾向が見られた（Kobayashi, 2010）。今回，「アセアン→欧米→アセアン」順序で留学した28歳女性の場合，2か月以上フィリピンで英語留学したのちに，カナダで一年以上の滞在をしたが，その後２回にフィリピンに戻って英語留学をしている（回答時はフルタイム勤務；留学中は無職）。彼女はカナダで「ネイティブの発音，話し方を学びたかった」が，「基礎がなければ，欧米では通じない。話す自信が出来ない」と分かり，再度「料金が安く，マンツーマンの授業があり基礎知識をしっかり身につけられる」フィリピンでの英語留学に戻っている（１回目は２か月未満，２回目は１年以上）。

このようにアセアン英語圏は，欧米英語圏での英語力上達や異文化交流のための準備場所として認知度が高まっているだけではなく，欧米英語圏でいい思い出は出来ても思い描いていたほどの成果を得られなかったと感じる若者たちの受け皿となっているのかもしれない。しかしながら，本稿で既に何度か言及しているように，英語学習者のまま英語留学を繰り返す日本の若者の存在は海外の有識者や英語教育関係者には奇異に映り，なかなか理解してもらえない。

先進国出身の若者が期待・体験する異文化理解・交流

留学予定者や留学奨励関係者による語りの中でよく登場するのが，短期海外留学中に現地の言葉を学ぶだけではなく，現地の人との接触を通じて現地の文化への理解を深めたい，または深めることが出来るという留学動機や意義である。本調査への回答者たちの間にも，欧米英語圏だけではなく「東南アジア」「ASEAN」「シンガポール」における文化理解や地元の人との交流への関心が伺えた。

なお，フィリピンでの文化理解に関する言及がなかった背景には，日本人英語留学生たちは彼ら向けに営業している門限のある寮に滞在し，現地教員によるマンツーマンのレッスンを集中的に受け続ける生活を希望して渡航しているためである。世界的に人気の観光地・シンガポールや日本人退職者に人気のあるマレーシアとは異なり，フィリピンを選ぶ外国人英語学習者たちは現地の人との交流や異文化体験を求めていない上に，そもそもそのような機会を提供する留学プログラムではない。現地の事情を長年調査している研究者たちも，「フィリピン英語留学は，その国や文化への憧れや人々との触れ合いなどよりも英語運用能力の向上に特化した道具的動機づけによるもの」としている（渡辺・羽井佐 2014, 61頁）。

日本人英語学習者に限らず，短期海外留学という数週間の滞在中に体験できる異文化体験・交流・理解に対して意見は分かれている。この点については，欧米圏大学に所属する現地大学生が体験する短期海外留学プログラムについても議論がなされている。批判的な立場として，例えば，恵まれた先進国の学生たちはある程度離れた「学生観察者」の立場から，現地の「人々」を単一的かつステレオタイプ的な「他者」として眺めつつ，現地に滞在しているに過ぎないという意見がある（Papatsiba, 2006, 10頁）。そこでは安全が保障され，学生たちやその出身国に批判的な見方をする人々との遭遇は回避されている。実際，日本の学生たちが交流する「現地の人びと」は往々にして現地の日系企業関係者や日本語専攻生など，日本（人）に好意的態度・関心の高いひとたちが選ばれる。そういう限られた親日的な「現地の人びと」と交流することで，楽しい（だけの）研修体験という思い出を作り，充実した気分で帰国していくこととなる。

さらに，アメリカ人学生向けに出版された留学ガイドブックを言説分析した研究によると，学生たちはアメリカ国内にいる移民たちとの出会いを通じて欧米以外の文化圏について学ぶことが可能であるにも関わらず，海外という「別世界」に住むと想定される「他者」の「地元住民」との交流によってのみ，「冒険」的な学びをすることができる，という言説を大学機関が生産している，と批判的に考察している（Doer, 2012）。アメリカの大学がホームページ上に掲載した留学奨励情報を分析した研究も同様に，平凡な，しかし居心地のいい（comfort zone）学生生活から一時的に抜け出し，レジャーとリラックスが保証された状態で，多少の未知の世界を体験できる魅力的な商品として，留学プログラムが開発・宣伝されている，と指摘している（Michelson & Valencia, 2016）。

その一方で，海外旅行のような短期留学体験について肯定的な見方も多く存在し，だからこそ，そうしたプログラムが国内外の大学機関が盛んに企画・実行しているのである。例えば，

ヨーロッパの交換留学制度（ERASMUS）参加者360名を対象に行った調査によると，主な参加目的が「楽しみ」（fun）であったものの，帰国後にその経験が学業やその後の成長につながるとして，楽しい研修参加は無駄ではないと論じている（Lesjak et al. 2015, 861頁）。また，日本社会において，欧米英語圏の大学での学位取得を目的としない，海外体験重視の短期留学プログラムが主流となってきた背景には，先進国として成熟した日本（人による留学形態）が「途上国型から先進国型に移行した」点を指摘する意見もある（太田 2017, 260頁）。そのような視点から考えると，日本の若者たちによる短期海外留学に関する学術的・教育的議論を今後さらに深めていく際に，欧米圏出身の大学生を対象にした短期海外留学研究が提示する知見を参考にしていく価値はあろう。

ただその際に留意しなければいけない点は，ヨーロッパ圏の学生たちは英語を含めた複言語話者である場合が大半であり，日本語モノリンガル者が多い日本の学生たちとは大きく異なっていることである。また，英語力が高く，見た目から現地の白人と区別されないヨーロッパ圏出身の学生たちが欧米英語圏に語学留学する場合と，英語力が低く，同じアジア人語学留学生同士で固まって行動する傾向のある日本人学生たちの場合では，留学経験の差が大きい（Kobayashi 2010）。英語学習者としての立場から脱却できない・しない・しなくてもいい日本の若者たちにとっての英語留学や短期体験重視型留学はどう評価されるべきか，今後ますます国際比較的な研究と議論が必要であろう。

アセアン英語圏における「英語」観

本稿でも確認できたように，アセアン英語圏で「英語」学習をする若者たちが増えていることは彼らの「ネイティブな英語」志向からの脱却を意味しない。日本の英語学習者たちは，他の留学生同様に，「英語」の学習地としての「アセアン」と「欧米」を区別・差別しているのである。

実際，欧米英語圏への留学理由に関する回答記述を見ると，「〇〇英語」（例：本場，スタンダード，流暢，ネイティブ，本格的，レベルの高い）といった数多くの「英語」に関する修飾句が使われている。それとは対照的に，アセアン英語圏への留学理由になると，単に「英語」としか書かれていない。そこには「国際英語」や「アジア英語」といった用語はなかった。なお，回答の中に「フィリピン英語」，「シンガポール英語」（または「シングリッシュ」），「マレーシア英語」という用語も見当たらなかった。日本の英語学習者たちがアセアン英語圏を英語留学先と認知し，選択し始めている背景の一つには，現地と日本の関係機関が宣伝の際に「英語」について具体的な言及をしていないために，現地でどのような英語が話されているのかという具体的なイメージが湧いてこない・定着していないことがプラスに起因していると考えられる。つまり，フィリピンで「英語」が話されているという認識はあっても，訛りのある「フィリピン英語」というイメージはない可能性はある。例えば，「結果」で示したように，ある回答者はイメージがなかったようで，「アセアンの英語は欧米に比べると発音の訛りや癖があることが分かったが，それでも日本とは比べ物にならない英語力の高さがあることが分かった。」と振り返っている。

その一方で，欧米とアセアンという二つの英語圏での英語留学を経験することで得られた「成果」について尋ねたところ，上記の回答者同様に，渡航前にはなかった「英語観」を持つようになった日本人英語学習者は少なくないようである：(1) 英語圏間の「英語」の違いへの新たな認識；(2)「完璧」な「正しい英語」とは違う「世界共通語」としての「英語」への気づき；(3) 現地，特に英語圏としてのアセアンへの気づき）。こうした結果は，World

Englishes, English as a Lingua Franca, English as an International Languageを推奨するGlobal Englishes研究者にとって歓迎すべきものであろう。と同時に，そうした新たな英語観が未だに「ネイティブ」志向の強い日本に帰国した後にどのように変化していくのか（しないのか），という点は今後の調査が必要であろう。

制約

まず第一に，本調査では欧米とアセアンという二つの英語圏に英語留学をすることにした動機や成果について尋ねたために，回答者たちに「英語」という観点からのみ留学体験を振り返ることを誘導してしまった点は否めない。そのため，「英語」以外に関する気づき（例：日本語を含めた多言語の案内表示，英語が通じない場所・現地の人）については回想させず，上記で考察したように，いずれの留学地も「英語圏」としての見方だけを浮かび上がらせてしまった可能性はある。ただし，彼らの現地滞在期間が多くの場合で短期間であり，その行動範囲は外国人観光客向けの安全圏内に限られている可能性が高いことを考えると，アセアンと欧米の「どちらも英語が溢れていた」という認識を持つに至る経験が多くなり，その英語観が帰国の日まで揺らぐことはなかったのかもしれない。

第二の制約として，「欧米→アセアン」という留学順序を奨励する教育言説が存在しない，という事前文献調査を踏まえた本調査は，「欧米→アセアン」という順序で英語留学をした回答者が４割以上に達する，という結果を想定していなかった。結果として，本調査ではその動機を深く追究する質問項目を設定せず，その考察には回答者からの自由記述に頼らざるをえなかった。著者自身，シンガポールとマレーシアにて，英語留学中の日本人学生や現地スタッフに調査を行ってきたが（Kobayashi 2011；2017），「欧米→アセアン」という留学順序を選択する日本人英語学習者がかなり存在する，という結果は得られず，そうした認識にも至らなかった。なお，Kobayashi（2011）では，欧米英語圏への留学に対する不安感からシンガポールでの英語留学に妥協した日本人英語学習者たちの存在を確認し，考察を行っている（241-242頁）。「欧米ではなくアセアン」または「欧米の次にアセアン」という留学パターンが日本人英語学習者の間で珍しくなくなっている背景には，日本の若者たちの間でのアセアン諸国の認知度・人気度の上昇があると考えられる。そのため，過去の調査ではこうした学生の存在はまだ少なかったのかもしれない。いずれにしても，欧米留学が最終目標である韓国人やその他の多くの留学生たちと比較すると，日本人英語学習者の留学順序とその動機を調査する研究には多角的な視点が求められているといえよう。

結論

日本の若者たちが「アセアン」という非欧米英語圏を英語学習や異文化理解の場として認識し渡航しているという事実は，歴史的に見ても大きな進展であるといえる。ただし，本稿が明らかにしたように，そうした新たな選択は「ネイティブ英語」を目標モデルとする従来の英語学習の継続に矛盾するものではない。「アセアン→欧米」群にしても「欧米→アセアン群」にしても，欧米英語圏にて「本場」の「生きた」英語を学んでみたいという動機や「ネイティブの英語」を学んできたという自己認識が留学順序パターンに影響している可能性が高いためで

ある。

さらに日本人英語学習者たちの留学順序とその動機は，諸外国の留学生たちのそれとは大きく異なっている。中国や韓国からの留学生たちの場合，欧米の高等教育機関で「英語で」専門分野を学び，学位を取得するという目標を持ち（または持たなくてはいけないような状況に置かれ），そのための通過点としてアセアンなど非欧米英語圏で「英語を」学ぶ。現地のスタッフにとってこうした学生たちの留学動機は分かりやすく，指導方針も決めやすい。対照的に，英語学習と異文化理解そのものが最終目的になっている日本人英語学習者たちは，現地スタッフだけでなく海外研究者にとってもなかなか理解がされにくい。彼らの理解を助けるための研究発表が必要であると同時に（例: Kobayashi, 2018；2021），マイノリティ化しつつある日本人英語学習たちを現地スタッフたちがどのように理解し，英語授業を提供しているのか，というテーマを追究する調査がますます必要となってくる（例：Kobayashi, 2017）。

なお，そうした調査はポストコロナ時代での実施となるため，コロナ前との比較という視点が不可欠である。コロナ前とポストコロナにおいて，日本人英語学習者たちの英語留学意欲と留学順序，そして，生き残った現地の語学教育機関やスタッフの受け入れ体制などにどのような変化があるのか・ないのか。こうした調査結果は，日本人英語学習者たちの在り方についてさらに国内外の関係者たちによる議論を続けていく上で，重要な知見を提供してくれるであろう。

謝辞

本調査は科研費（19K00756）の助成を受けたものである。

参考文献

太田　浩（2017）「おわりに」横田　雅弘・太田　浩・親見　有紀子（編）『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト―大規模調査による留学の効果測定―』259-261頁　学文社

小林　和美（2017）『早期留学の社会学：国境を越える韓国の子どもたち』昭和堂

嶋内　佐絵（2014）「何故，英語プログラムに留学するのか？―日韓高等教育留学におけるプッシュ・プル要因の質的分析を通じて―」『教育社会学研究』94, 303-324.

嶋内　佐絵（2016）『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換―大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較」東信堂

JETプログラム（2019）「JETプログラム参加国」2019年7月1日時点http://jetprogramme.org/ja/countries/

日本修学旅行協会（2019）「2019年度実施海外教育旅行の実態とまとめ（抜粋）』https://jstb.or.jp/publics/index/49/

星野　晶成（2015）「日本人大学生の東南アジア留学の現状とその特徴―JASSO統計から見えてくるもの―」『留学交流』47, 31-47

吉田　文（2014）「「グローバル人材の育成」と日本の大学教育―議論のローカリズムをめぐって―」『教育学研究』81（2）, 164-175.

渡辺　幸輪・羽井佐　昭彦（2014）「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継続的インタビューを手掛かりに」『相模女子大学文化研究』32, 47-66.

Kobayashi, Yoko（2010）. Discriminatory attitudes toward intercultural communication in domestic and overseas contexts. *Higher Education, 59*（3），323-333.

Kobayashi, Yoko（2011）. Expanding-circle students learning ‘standard English’ in the outer-circle Asia. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 32*（3），235-248.

Kobayashi, Yoko (2017). ASEAN English teachers as a model for international English learners: Modified teaching principles. *International Journal of Applied Linguistics, 27* (3), 682-696

Kobayashi, Yoko (2018). The neo-liberal notion of global language skills vs. monolingual corporate culture: co-existence or rivalry? *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 39* (8), 729-739

Kobayashi, Yoko (2020). Studying English both in the ASEAN region and the West: Japanese multiple sojourners' self-identity, privilege, and global isolation. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* (Advanced online publication). https://doi.org/10.1080/01434632.2020.1835928

Kobayashi, Yoko (2021). Non-globalized ties between Japanese higher education and industry: crafting publicity-driven calls for domestic and foreign students with global qualities. *Higher Education, 81* (2), 241-253

Michelson, Kristen & Valencia, José Aldemar Álvarez (2016). Study Abroad: Tourism or education? A multimodal social semiotic analysis of institutional discourses of a promotional website. *Discourses & Communication, 10* (3), 235-256.

Lesjak, M., Juvan, E., Ineson, E. M., Yap, M. H. T., & Axelsson, E. P. (2015). Erasmus student motivation: Why and where to go? *Higher Education, 70* (5), 845-865.

Papatsiba, Vassiliki (2006). Study abroad and experiences of cultural distance and proximity: French Erasmus students. In M. Byram & A. Feng (Eds.), *Living and Studying Abroad: Research and Practice* (pp. 108-133). Clevedon: Multilingual Matters Ltd.